

ジェンダーと現実認識

—山一証券自主廃業をめぐる新聞投書を通して—

熊谷 滋子

1. はじめに

新聞に掲載される投書を興味深く読んでいる。それは、老若男女誰でも投稿できるため、時代を映す鏡として、貴重な資料ともなっている。私は、新聞投書を利用して、日本語の書き言葉における男女差を調べてきた。日本語には男ことばと女ことばがあるとされてきているが、その分析対象は話し言葉が中心である。そこで、書き言葉ではどうなのか調べてみたくなったのである。すでに、国緒英子(1987)や佐竹久仁子(1995)によって指摘されているように、新聞投書において、文体（例えば、「ですます体」かどうか）や内容（私的なものか公的なものか）などに、ある傾向的な男女差がみられるものであったが、私の分析(1996)でも同じような結果がで、それを裏付けることができた。と同時に、それも時代とともに縮まりつつあることも確認している。

ところで、私は、投書の文体や内容を男女差（以後ジェンダーとする）の視点から分析する一方で、投書を読んで、読み手が書き手について、特にジェンダーに関して、どのように認識しているのかを改めて調べることにした。その調査方法は、ある日の新聞投書のいくつかを個人情報（住所、氏名、年齢、職業）をふせて大学生に提示し、その投稿者の性を予想してもらうのである。その際、判断根拠も自由に書いてもらうことにした。実は、最初は、軽い気持ちで調査をしたのだが、大学生の回答には、意外なほどのジェンダーをめぐるステレオタイプ（ここでは、特に女性または男性に対する固定的なイメージや偏見を意味するものとする）⁽¹⁾が表現されていることが分かってきた。例えば、「論理的に書かれているために男性」「感情的なので女性」などが頻繁にあげられている。このようなステレオタイプは、回答者の性や学年に関わりなく、ある共通したイメージをもっている。このような事実にある種の驚きを感じないではいられなかった。

それは、例えば、質問を予め用意し、賛否選択法による回答（例えば、『男は仕事、女は家庭』という考え方をどう思いますか』という質問と「同感する、どちらともいえない、同感しない」という選択肢からなるような調査法）とは違い、投書を読み、それについて自由に回答してもらう方法であるため、学生の気持ちが素直に表現されやすかったのかもしれない。日常生活において、投書の投稿者の性を予想しながら読むことなどあまりないため、この調査自体が新鮮であり、また、読む

という行為が投稿者の見方、感じ方を自身のものと照らしあわせることを可能とし、自分の気持ちを文章に出しやすくしていたのかもしれない。さらに、この調査は、一度回答して終わりにするのではなく、その後、回答の結果を回答者である学生たちに紹介しながら、彼らと意見交換をすることで、いままで抱え込んできた自分たちの、ジェンダー意識への気づき、ないし、自覚をうながすことも可能ではないか、とも考えるようになった。同時に、このような調査の展開は、社会言語学のより具体的な応用とも位置づけたいと考えるのである。

投書を読む学生である回答者のジェンダー意識を調べる、このような新たな調査に着手してきたものの、判断根拠として何がより決定的な要因となっているのか(例えば、文体か内容か)、ある日の新聞投書をただ一般的に取り上げるだけでは、難しいということが分かってきた。文体と内容は切っても切れない、コインの裏表のような関係にあるため、二つの要因として機械的に分けてしまうことはできない。例えば、ある投書が女性によって書かれたものであると判断したのは、それが料理を扱っているからなのか、丁寧体で書かれているからのなのか、どちらが決定的な要因となって判断に影響を与えていたのか、これまでの方法では、分析ができなかった。

2. 調査について

2.1 調査方法

「はじめに」で述べたような方法上の反省をふまえ、今回では、多岐にわたる投書のテーマを一つに絞りこみ、さらに、調査する要因も2点に限定し、それらが性別判断にどう影響を与えているのかを調べることに心掛けた。今回取り上げるテーマは、「山一証券自主廃業」をめぐる投書である。この出来事は、バブル崩壊後の最大の事件であるばかりでなく、多数の社員の解雇という、社会的な大問題である⁽²⁾。このテーマの投書を読むと、文体 レベルにとどまらず、内容についても、ジェンダー問題がうかびあがってくるように感じたからである⁽³⁾。したがって、これらの男女差を、大学生がどう理解し、判断しているのか、彼らのジェンダー意識を考察するのに格好なケースと受けとめ調査に入った。

様々な要因を漠然と提示するのではなく、今回は、文体では、「ですます体」(＝丁寧体)であるかどうか、内容では、個人的事柄や家族への言及があるかないかという二点に絞れるような投書を選んでみた。そして、それらの組み合わせで4種類に分け、それらについて男女それぞれの投書を8つ選びだし、実験的な調査を試してみることにした。特に、内容については、会社の経営破たんという深刻な事態であったことから、投書には、かつての自身の経験(倒産、転職等)や、家族のこと(苦しい中での家族の支え合い、励まし)についてあげられていたのが数多く、又、

それが特徴的であった。それがまた、より性差を感じさせるものとなっていたのである⁽⁴⁾。

調査は、山一証券自主廃業関連の投書（『朝日新聞』東京版、1997年11～12月に掲載されたもの）⁽⁵⁾の中から、表(1)のように、男女それぞれのものを提示し、学生に投稿者の性を判断してもらうものである。その際、あわせてその判断根拠について、語句・表現・内容、その他どんなことでも自由に記述してもらうこととし、判断できない場合には、その理由もあげてもらうこととした。対象学生は、静岡大学の1年生～4年生（社会人学生も含む）で、学部は、人文学部、工学部、農学部に在籍している、女性110名、男性108名の計218名に対して行なうこととした。実施時期は、1999年4月～7月である。

表(1)は、文体と内容の組み合わせと、それぞれに対応する男女の投書を示している。以後、○で囲まれた数字は投書番号を示す。調査対象とした投書の詳細は付録を参照されたい。

表(1) 文体と内容の組み合わせ

分類	ですます体	個人的事柄 家族への言及	投書番号	
			男性	女性
1	○	×	①	⑤
2	×	○	⑥	②
3	○	○	③	⑦
4	×	×	⑧	④

○：満たしている ×：満たしていない

この表について簡単に説明すると、例えば、分類1は、「ですます体」が使用され、個人的事柄や家族について言及されていない投書のことを指し、具体的な投書は、男性投稿者のものが①、女性投稿者のものが⑤であることを示している。

2.2 調査結果

今回調査した結果は、表(2)に示す通りである。

全体として、これまでと同じく、回答者の性、学年（50代～60代の社会人学生も全体の3割程含んでいる）、専攻による差はみられなかった（ここでは、省略する）。つまり、性別判断に関しては、大げさに言えば、老若男女問わずに、共通しているということが確認できる。また、今回の投書は、証券会社の自主廃業という、直接的には、いわば経営・経済を扱ったものであり、全体として、決定的な要因がなければ、つまり、「ですます体」でもなく、個人的事柄や家族への言及がない場合には、書き手を男性と判断する傾向にあった。

今回の調査結果を、さらに分かりやすくするために、表(1)を利用して、判断さ

れた性別の結果を表(3)に示す。

表(2) 山一証券自主廃業関連の投書についての性別判断調査

回答者 判断 投書 番号	男性(108名)			女性(110名)			合計(218名)		
	男性	女性	?	男性	女性	?	男性	女性	?
①	27 (25.0)	66 (61.1)	15 (13.8)	31 (28.1)	63 (57.2)	16 (14.5)	58 (26.6)	129 (59.1)	31 (14.2)
②	11 (10.1)	96 (88.8)	1 (0.9)	10 (9.0)	99 (90)	1 (0.9)	21 (9.6)	195 (89.4)	2 (0.9)
③	105 (97.2)	2 (1.8)	1 (0.9)	102 (92.7)	4 (3.6)	3 (2.7)	207 (94.9)	6 (2.7)	4 (1.8)
④	90 (83.3)	7 (6.4)	11 (10.1)	86 (78.1)	16 (14.5)	8 (7.2)	176 (80.7)	23 (10.5)	19 (8.7)
⑤	35 (32.4)	54 (50)	19 (17.5)	34 (30.9)	59 (53.6)	17 (15.4)	69 (31.6)	113 (51.8)	36 (16.5)
⑥	93 (86.1)	5 (4.6)	2 (1.8)	104 (94.5)	3 (2.7)	3 (2.7)	197 (90.3)	8 (3.6)	5 (2.2)
⑦	15 (13.8)	89 (82.4)	4 (3.7)	10 (9.0)	94 (85.4)	6 (5.4)	25 (11.4)	183 (83.9)	10 (4.5)
⑧	95 (87.9)	4 (3.7)	9 (8.3)	86 (78.1)	12 (10.9)	12 (10.9)	181 (83.0)	16 (7.3)	21 (9.6)

数字の下段の()は%
?はどちらとも判断できないもの

表(3)

分 類	ですます体	個人的事柄 家族への言及	投書番号		判 断 結 果
			男性	女性	
1	○	×	①	⑤	女性
2	×	○	⑥	②	◎
3	○	○	③	⑦	◎
4	×	×	⑧	④	男性

表(3)で示していることは、例えば、判断結果に「女性」とあるのは、投書番号①⑤について、「女性」と判断した割合が高かったということである。さらに、「◎」は、投稿者の性と、判断結果の性がかなり一致していることを示している。

3. 調査からみえてくること

3.1 「ですます体」と女らしさ

今回の調査で分かったことの一つとして、「ですます体」で書かれ、個人的事柄や家族への言及がない場合には、女性を書いたと感じる人が多いということである。それは、分類1にある投書①と⑤があてはまる。判断根拠として、文体との関連をあげているものを紹介したい。

①女性と判断：ですます調・言い方が優しい・やわらかな言い方をしている

⑤女性と判断：語調が優しい感じ・言い方がやわらかい・男性ならもつとはっきり述べる

ただし、直接的には経営・経済について扱った投書であるためか、性を判断できないと感じた回答者の割合も、他の投書のそれと比べると高かった（①14.2%、⑤16.5%）。その理由には、経営・経済のことは、男性の得意分野だが、「ですます体」は女性が使用する傾向にあるのではないかとといった理由で判断できないとしたものもあった。どちらにしても、「ですます体」は女性が使用するものという意識が存在していることが以上のことから確認できる。しかし、加えて、判断できないと感じた人の理由には、例えば、①については、「今は昔と違って、女性の高学歴化が進んでいるため、語彙が豊富な人もたくさんおり、男性ゆえに内容が濃いか、丁寧語を使っているから女性ということもできない」というものや、⑤について、「丁寧語であるため、中性的なイメージにとれる」というものも少しあった。「女性の高学歴化」という指摘もなされるようになり、女性ゆえに「ですます体」で書くというイメージは、ゆるやかではあるが、崩れつつあることが分かる。

①、⑤とは対照的に、個人的事柄や家族への言及がなく、かつ、「である体」で書かれている場合、つまり投書番号④と⑧については、圧倒的に男性が書いていると判断する傾向がある。回答者の8割が男性と判断している。これらの投書についても、文体にふれている判断根拠をあげる。

④男性と判断：である調・断定的表現・ですます調を使っていない

⑧男性と判断：厳しい口調・かたい感じ

しかし、判断できないとした人の理由には、①と同様に、次のような指摘がみられた。④の投書について、「男女どちらでもこのようなことは書ける」とか、『である調』のため論文を書き慣れた人なら、男女の区別なく書くことが出来る」といったものもあった。ここでも、数はすくないが、従来の、「である体」＝男性、「ですます体」＝女性というイメージが薄くなってきているということを示唆するものでできている。

以上のことより、個人的事柄や家族への言及がない場合には、文体（形）で判断しがちであることが分かる。これまで、様々なところで、「ですます体」が、女らしさと結びついていることが指摘されてきたが、今回の調査からも確かめられた。

かつて、武田春子(1990:29)は、1988年に起きた連続幼女殺人事件での犯行声明文の書き手の性をめぐって、新聞等で紹介された識者のコメントを分析し、女性と判断する根拠として、「丁寧、やわらかい」という文体の特徴をあげていると指摘していた。しかし、今回の調査において、わずかではあるが、「ですます体」が女らしさに必ずしも直結するするわけではないことを示唆するものもでてきている。男女等しく教育を受け、女性でも「である体」で文章を書く機会が増え、それを体験してきている学生には、このことが実感として認識されてきているのだろうか。

ただし、判断根拠の中に、同じ「ですます体」でも、あるいは「である体」でも、男用と女用があるのではないかという興味深い指摘もあった。同じ「ですます体」でも、古めかしい言葉遣いや、かたいイメージが醸し出されている場合には、男性が書いたものとし、「である体」でも表現が豊かで、わかりやすい場合には女性が書いたものとする直感は、かなり本質をついているように思われる⁽⁹⁾。この点については、今後さらに検討していきたい。

3.2 性別役割分業体制と現実認識

今回の調査で分かったことの第二点目として、個人的事柄や家族への言及があれば、文体に関わらず、書き手の性かなりの確率で分かってしまうということである。前述したように、この点に関しても、回答者の側の性による差がないということも再確認しておきたい。全体として、回答者の約9割が正答している（正答率は②89.4% ③94.9% ⑥90.3% ⑦83.4%である）。判断根拠としてあげられたものを紹介したい。

②女性と判断：結婚や子供に対しての記述がこまかい

：寿退社している
：身近なこと、日常的なこと

③男性と判断：一家の大黒柱的存在

：女性はその年代ではキャリアは少なく、再就職という言葉もなじまない
：女性の40代ならパートとして採用されるだろう

⑥男性と判断：一家の大黒柱的存在

：「裸一貫」「私事で恐縮だが」
：「信用組合の役員」→現在ならまだしも、20年前に女性役員はほとんどいなかったと思う。
：「私財全部を提供」→私財全部を提供してまで、仕事しようと思うのは男性。女性ならそんなことするくらないなら、やめてやと思うだろう。

⑦女性と判断：母親を思う娘心

：山一側の責任を強く問うのではなく、弱い立場の人たちを応援する内容
：「食事もできないほど」→落ち込み具合を食生活の点からみて表現している

②③⑥⑦の投書について、文体よりも、個人的事柄や家族への言及という要因が、判断する際の決定的なものとなっており、かつ正答率がかなり高いということは何

を意味しているのだろうか。それは、今回扱った投書が、どちらかというと「男は仕事、女は家庭」という、夫と妻の性別役割分業によって支えられてきた大企業、山一証券をめぐるものであったため、投稿者の文章は、よくもわるくもこの分業体制の現実をより象徴的に反映することになったのであろう。このような社会体制から生まれてくる男女の非対称性を、学生がリアルに認識したのではないだろうか。私の感じた男女差を学生も感じていたのである。ここで、「Personal is political」（個人的なことは政治的なこと）としたフェミニズムの言葉が思い起こされてくる。

さらに回答者の判断根拠をみていると、このような社会における男女の差（特に、社会的立場）の存在を、是としてはいないということを示唆するものもある。例えば、③について、「言いにくいことだが、はっきり言うと、40をすぎた女性を採用する会社などめったにない、ということなのだ。残念なことである」とし、⑥について、「20年も昔は女性が信用組合の役員になるどころではなく、結婚したら退職、ある年齢になれば、肩叩きといった差別が横行していた」と指摘している。つまり、このような男女間の不平等に支えられた社会について、高度経済成長期には、一般に当然のこととして受け入れられ、違和感を感じなかったものが、女性の高学歴化、男女の平等化が牛歩ではあるが、漸進するにつれ、又、それと共に、社会的にも男女の共生、参加が叫ばれるようになってきた昨今、このような状況に違和感を感じる者も出てきていることが示されているのではないだろうか。

3.3 ジェンダーをめぐるステレオタイプ

学生の回答にあった具体的なステレオタイプを整理、紹介していく前に、参考として、ことばの面から分析したジェンダーをめぐるステレオタイプについて、これまで指摘されてきたものを紹介しておきたい。前述した、武田春子(1990:29)は、犯行声明文に対する、新聞等に登場する「識者」のコメントに「根強い性差別観念がある」と結論づけている。また、牧野成一(1979:211~213)は、アメリカ人と日本人の学生に共通テーマ（「テレビの 功罪」）を与え、母語でエッセイを書いてもらい、さらに、提出されたエッセイから、それぞれの母語で書き手の性別を判断してもらい調査を試みている。彼の分析では、エッセイ自体には、他のジャンルの書き物に比べ、性差はあまりみられないとしながらも、日本人の性別判断の回答のなかに、強いステレオタイプ像が見られるとしている。例えば、女性とする理由では「個人的、具体的、印象的、せまい視野」で書かれているためとし、男性とする理由では「論理的」に書かれているためだとしている。さらに、文体と性との関わりについて、日本人は男女ともに、女性の文体は、「非論理的、直観的、標準にあわせる、些末なことをいう、はじめと終わりが下手、自分の視点から書いている」とみなすことに違和感を感じていないとしている。一方、アメリカ人はこのような見

方にはあまり賛成できないとしている。

その上で、今回の調査結果をみるかぎり、判断根拠にはジェンダーに対するステレオタイプが見え隠れしている。具体的に示すと、例えば、実際は男性が書いた投書である①について次のような根拠をあげている。

男性と判断：法的なこと

：理論的

：理路整然としている

：内容が政治的

女性と判断：感情的、一般的な正義をぶつけている。世の中そんなに正しくいくはずがないことを知らなさすぎ

：難しい言葉のオンパレードで、私は経済に詳しいのよ、と言っているようだ

：女性のねちねちした感じ

同じ投書でも、男性と判断する場合には、論理が通っていて、きちんとしているという理由をあげ、女性と判断する場合には、「感情的」で「ねちねち」しているという理由をあげている。他の投書にもこのような、ある共通したステレオタイプがみられ、今回あげられた判断根拠の典型的なものを中心にまとめると、以下の通りとなる。まとめるにあたって、それらのイメージを肯定的なものと否定的なものに分類してみた。

表(4) ジェンダーをめぐるステレオタイプ

	肯 定 的	否 定 的
男性	論理的・客観的・冷静 理路整然・筋道だっている 社会的・広く深い意見 的確・現実的・専門的	うんちくをたれる・厳しすぎ 過大評価・保身・かつこつけ 生活感がない・プライドが高い
女性	発想のやわらかさ 意見が押しつけがましくない 弱い立場の人を応援・同情的 思いやり・きめ細かさ・優しさ 温かい配慮	感情的・客観的でない・受け身 リアルさに欠ける・皮肉っぽい おせっかい・ねちねちしている まわりくどい・甘え・他人事

今回の投書は、証券会社に関連したものであり、直接的に経営・経済に関わるものであったため、よりいっそう、「論理的」というステレオタイプが出てきたのかもしれない。もし、投書が、子供のことや料理にまつわるものを扱っている場合、たとえ、論理明快な書き方をしていても、「論理的」という判断根拠をあげる人は何人いるだろうか。男性が関わるとされる、公的なもの、つまり、政治、経済、または会社経営について、「批判的」に述べられていれば、「論理的」とか「客観的」といったステレオタイプが顔を出してくるのである⁽⁷⁾。

ここで、表(4)にまとめた判断根拠の男女それぞれについての、肯定的・否定的なステレオタイプを改めて考えてみたい。先の武田春子氏の分析対象とした、「識者」のコメントにみられるステレオタイプにも通じるものだが、男性の肯定的ステレオタイプと女性のそれとはなにかしらギャップがあるように思われる。男性の肯定的ステレオタイプは、男女に関わりなく、人間として大切な要素が多いのに対し、女性のそれは、人間としてというよりも、どこか「女らしさ」に通づるものがみられる。「同情的」「思いやり」「きめの細かさ」「優しさ」などは、よく「女ならではの」といった修飾を伴って、さまざまところで「女らしさ」を示すものとして、顔を出してくるものである。「あの人は思いやりをもっている」といえば、女性の評価だけではなく、男性の評価においても好ましいイメージをもっていることは確かであるが、例えばある女性が「思いやり」をもっていないとされれば、女らしくないというレッテルが貼られてしまうのである。女性にとって、「思いやり」は一つの規範になっているもので、男性の評価とは別の意味を伴ってくるものである。

一方、否定的なステレオタイプについて、男性の方は、「男らしさ」に通じるものが感じられ、「しょうもないなあ、男なんだから」というニュアンスが含まれている。それに対して、女性の方は、「感情的」「ねちねちした」というものでも分かるように、「女特有の」という修飾にぴったりあてはまるものばかりである。これまで調査を行なってきた、強く印象に残っていることの一つに、女性の回答者自身も、同性に対して、このような否定的なステレオタイプを抱いてしまっている（抱かされてしまっている）ことに気付くきっかけになっていることがあげられる。このようなステレオタイプの再生産は、性別役割分業体制や男女間の非対称性が残っている限り続いていくのである。

4. おわりに

今回の投書を利用した性別判断調査について、重複をいわず再度、その持つ意味を整理していきたい。

第一点として、文体との関連において、「ですます体」で書かれた投書は、依然として女性のものとする傾向にあることが確認できた。今回は、経営・経済に関わるテーマを扱ったため、数としては、男性であると判断するものが多くいたが、やはり、「ですます体」と女性とは結びつけられがちであった。しかし、必ずしも、「ですます体」が女性で、「である体」が男性であるとは言いきれないという指摘が僅かではあるが発見できるようになってきたことは、男女平等へ向けての社会的、政治的な啓蒙と女性の高学歴化の一定の成果とも考えられよう。

第二点に、個人的事柄や家族への言及があれば、文体にかかわらず、書き手の性が分かるということがあげられる。今回の投書は、山一証券という、典型的な大企

業をテーマとしたもので、「男は仕事、女は家庭」といった役割分業体制をよく反映し、特に個人的事柄や家族の記述が、よりジェンダーを鮮明にさせていることが分かる。しかし、この社会の関係を、肯定しないという現実認識をもって性別判断している学生も少しだが現われていることも注目されよう。

第三点に、これまでの投書を利用した性別判断調査と共通し、依然として、「論理的なのは男性」「感情的なのは女性」等のジェンダーに対するステレオタイプが判断根拠として提示されているということである。第二点と同様に、社会的に分業役割体制が根強く存続し、男女の非対称的な生活が再生産されているからであろう。

以上のような今回の調査から改めて考えられることを、つづめて言えば、教育上の、あるいは、社会的な建前の場では、男女は平等だとされながら、社会的実態としては不平等であることを知り、その矛盾のなかで生きているのが今日の学生の実態、ないし、意識といえるのではないだろうか。当然ながら、この矛盾の解決のためには、その矛盾を作り出している社会体制を変容していくこと、また、ことばを通して社会的な矛盾に気付くような主体的状況を形成していくことが大切なのではないかと思う。そのためにも、社会の言語としてのことばからの働きかけの重要性が求められるのである。

最後に、今回の調査は、文体と内容の関係のごく一部を明らかにしたに過ぎない。文体と内容の影響関係をより厳密にとらえるためには、今後さらに、投書を含めた多様な題材の分析とともに、ことばとジェンダー認識をめぐる調査を重ねる必要がある。

付録：山一証券自主廃業に関連した投書の例

（カッコ内は、投稿者の性、職業、年齢を示す。住所、氏名は省略する。カッコの後の数字は、掲載された日付。いずれも、『朝日新聞』東京版で、1997年のもの。）

①経営破たんの法的責任問え（男性、無職、62歳）11.26

金融システムの維持・安定という大義名分のもとに、巨額の公的資金（税金）が、山一証券の顧客保護のために投入が検討されていますが、経営者の法的責任を厳しく追及することが条件でなければ、とうてい納得できません。

「飛ばし」という損失隠しや総会屋に対する利益供与、一部顧客への損失補填（てん）などの行為が、商法や刑法に違反しないことはありません。

社長が「私らが悪いので、社員は悪くありません」と、記者会見で涙を流していましたが、この不正に加担していた歴代の取締役全員が、私財をなげうって公的資金導入の責任を国民に対してとるのが当たり前ではないでしょうか。

住専処理から引き続き発生している金融機関の倒産や、あちこちで起きているカラ出張問題などは、見方を変えれば背任、横領、文書偽造などの罪に限りなく近いように見えるのですが、だれも法的責任は問われていないようです。

それどころか、当事者として経営責任を負うべき役員が、たまたま任期中に不正が発覚しなかったため、高額の退職金をもらっているなどという話を聞くと、辞書から「正義」と「責

任」という言葉を消してしまいたくさえます。

私たちが時には「水に流さない、玉虫色の決着をさせない」という執念深さを持つ必要があると思います。

②本当に強いね 山一のみんな（女性、主婦、32歳）12. 9

山一証券を退社して二年余り、破たんのニュースに涙が止まらなかった。

自分の持つ山一証券の株券が紙切れになってしまったのもショックだったが、今でも働く同期の友人や、お世話になった上司、先輩方、多数の同僚たちのことを考えると、本当に切なかった。私は、自分が思っていた以上に、山一証券を愛していたのだ。

廃業申請決定の翌々日、そんな同期の一人が、わざわざ電話をくれた。「心配しているだろうと思って」と。こんな時でさえ、他人のことを気遣える彼女に頭が下がった。

また、社内結婚して会社を辞め、今は三人の子を持つ友人に先日、恐る恐る電話してみた。開口一番、彼女は「私が泣いていると思った？泣いてなんかいられないわよ」と、明るく言った。破たん後の清算業務で身も心もボロボロになって働いている夫の前で、泣くことなんかできない、と。「死んじやう人だっているんだから、こうして家族全員元気で生きていられるだけで幸せ」と、彼女は笑って言った。

みんな、本当に強いね。一人メソメソすることしかできなかった自分が、急に恥ずかしくなった。「試練は、それを乗り越えられる人間にだけ与えられる」という言葉を、どこかで聞いたことがある。みんな、どうか頑張て。

③山一での過去捨てて未来を（男性、会社員、48歳）12. 17

連日、山一証券社員の今後の生活のことが報道されています。確かに経営破たんは、社員にとって大きな問題であり、同情は禁じえません。

その反面、それらの報道は過保護に思えるところもあり、反発を感じることがあります。私は、二十三年間勤めた中小メーカーを体をこわしたのが原因で退職し、現在の会社に採用されました。不況の中で、四十歳を過ぎた私を採用してくれた会社には今も感謝しております。と同時に、再就職後の私自身の努力にも自分ながら拍手を送っております。

私の場合は自分の選択だから仕方ありませんが、山一社員もいつまでも経営者の責任だと言っているわけにはいかないでしょう。破たんの責任の一端は社員にもありますし、自分のことは、自分と家族などの協力で解決しなければなりません。

山一社員も、中高年層の再就職が厳しいと報道されています。だが、職種などを限定しなければ、就職することができると思います。ただその際、過去の地位など、プライドを捨てることができるかが問題でしょう。収入についても、大幅減が予想されますが、それなりの収入にあった生活をする勇気が必要だと思います。

過去は過去とし、これらの問題を克服して、立派に、そして幸福に生活していくことが、真の「山一社員としてプライド」なのではないでしょうか。どうか今後の姿勢で、そのプライドを発揮して下さい。

④どこまで続くバブルのツケ（女性、主婦、46歳）11. 29

山一証券に続き、徳陽シティ銀行の破たんが報道され、金融業界の現状に対する不安は、日を追って増幅されるばかりである。

とりあえず、その渦の外側に身を置いているつもりでも、複雑な経済機構の中に組み込まれている我々一人ひとり、いや応なく影響を受けることになる。

こんな状況を引き起こした元凶は何なのか。破たん企業の経営陣の判断の甘さが弾劾されるが、彼らだけの非をうんぬんしてすむ問題だろうか。

そもその始まりは、あのバブル時代にあることを、私たちは思い知るべきである。逆にまた、あのバブルさえなければ、現在苦境に陥っている企業のほとんどは、健全な経営を続けていただろうと推測できる。

今振り返れば、熱に浮かされていたとしか思えない。不動産と株の価格の連日の上昇。そ

の中で、あらゆる人間が踊らされた。だれかが引き留めなければいけなかったのに、政治家や官僚までもが、自分たちの使命を忘れて、金もうけに走った。実態の裏付けのないまま上昇を続けた経済が、当然のようにはじけたとき、我々の右往左往が始まった。

日本は今、バブル以前の状態に立ち戻ったのだ。そして、あの数年間の甘い生活のツケを、これから払っていかねければならない。当時、踊る人々を横目に黙々と働き続けた多数の人々も、痛みを分かち合うことを余儀なくされる。

経済のかじ取りを担う政治家、官僚、そして企業トップに、真に優れた識見の持ち主がいてくれたらと、これほど思ったことはない。この教訓が生かされる日は来るのだろうか。

⑤山一の社員を郵貯で生かせ（女性、経理パート、36歳）12.10

現在、郵便局の貯金は、大蔵省の資金運用部に預けられて財政投融资で運用されています。報道によると、将来、郵便局の貯金は、自主運用されるようです。その時、運用先の主なものは、株式市場、為替市場、債券市場、金融市場などになると思います。しかし、その市場は機関投資家同士の食うか食われるかの弱肉強食の世界です。

相場のトレーダーはそれなりの訓練が必要です。失敗をしながら学んで、そして、最先端の金融知識が必要だと思います。しかし、郵政省のお役人にそのような訓練がされているでしょうか。当面は投資顧問会社に預けていくにしても内部にそのような人材が必要ではないでしょうか。ファンドマネージャーが必要ではないでしょうか。

専門家でさえまかり間違えば、ばくだいなる損失を被ることがある金融市場に、シビアに訓練された専門家なしの参加では、裸で世間に出ていくようなものです。将来、公社になってから損失が発生し、またあとで税金で補填（ほてん）する恐れはありませんか。

今、山一の倒産で優秀なファンドマネージャーやアナリストが失業し、その人材は外資系の会社に流れようとしています。将来の郵便資金の自主運用に備え、これらの人材を郵政省が採用すべきだと思います。彼らも失業経験で安定志向が生まれているはずです。

⑥破たんの責任私財提供せよ（男性、元信組専務理事、63歳）12.18

北海道拓殖銀行、山一証券と一流の金融機関が破たんし、あとは日銀・大蔵省が責任をもって何とかしてくれるという。金融機関の責任者たちの無責任な行動にはあきれて、悲しい限りである。三日の本紙社説に「経営者も大蔵も無責任だった」とあったが、同感で拍手を送りたい。

国会も預金者保護にのみ力を注ぎ、責任者たちへの責任追及を忘れている。立ちゆかないと、「迷惑をかけました、辞職します」では、問題は解決しない。

中小企業の経営者は倒産すると、財産もすべてなくなって、裸になってしまう。一流の銀行になれば、辞職すればよく（中には億単位の退職金までもらって辞めていく）、自分自身の痛みを知らず、あとは野となれ山となれというのでは、困ったものだ。

私事で恐縮だが、二十年ほど前、信用組合の役員をしていたときのこと。不良債権が多くて、自助努力ではどうにもならず、預金保険機構、全信組連と某銀行にお世話になった。そのとき、知事に財産を提供するように言われ、私財全部（当時三千万円相当）を提供し、裸一貫になった。当時私は四十二歳、子供三人を抱えて、死にものぐるいで働いた。各銀行が赤字になりながら毎年多額の償却をしているにかかわらず、役職者の給与、退職金などは景気のよいときのままでは、国民は納得できない。

⑦山一ミディの母も頑張って（女性、主婦、33歳）12.18

私の母は山一証券の契約社員で、今回の突然の破たんに、食事もできないほど落ち込んでいます。

「山一ミディ」と呼ばれ金融商品の販売を担当し、少しでもお客に有利になるようにと、経済情報誌を複数購読して勉強していました。今回の事態も雑誌で知って不安に思っていたが、社内では「デマにまどわされるな」といわれ、支店長の「九九%大丈夫」の言葉に、母のお客は山一の株を購入しました。その翌朝、破たんの報道が流れ、母は大事なお客に迷

感をかけたうえ、自分も職を失うことになったのです。

解約や整理作業に追われている毎日ですが、元金割れもあるようです。母たちが扱っている小さなお客については「会社は何もしてくれないので、自宅を売ってでも何とか穴埋めをしたいくらいだ」といっていました。地元で仕事をしてきた母には、知らぬ顔も出来ないというのです。

母たち女性契約社員は、七千五百人の解雇者には含めてもらえません。母のことで、報道されない多くの失業者がいることを知りました。母は幸い生活には困りませんが、失業で困っている同僚も何人かいるようです。「逆境にめげずに頑張って」としかいえませんが、早くいつもの張り切り母さんに戻ってほしいと願っています。

⑧公的支援なら責任者追及を (男性、弁護士、52歳) 11.27

「金融システムの安定」。何と便利で心地よい響きのある用語であろうか。この言葉が発せられると、すべての悪行、非行がオブラートに包みこまれて、霧消するかのような気分になるから不思議だ。

大蔵省に教えていただきたい。どうすれば北海道拓殖銀行が九千三百億円という巨額の負け付き債権をだすことができたのか。山一証券の簿外債務二千六百億円の原因が「飛ばし」であったとすれば、大蔵省の肝いりでつくられた証券取引等監視委員会は何をしてきたのか。

今、中小企業の不況はあえいでおり、経営者は給料カットをしたり、個人資産を担保に出したりしている。銀行や証券会社の給料は世間相場より高いといわれているが、拓銀や山一でこのような努力がなされてきたのであろうか。

高給をはじめ、不正を重ねた揚げ句、経営が行き詰まり、公的資金を導入するというのであれば世の公正、公平が保たれない。まじめな者ほどばかをみることになるからだ。

アメリカで貯蓄貸付組合の経営破綻(はたん)に公的資金が使われたことも議論になっているが、その際、経営者ら多くの関係者が裁判にかけられ、刑務所におくられたことを忘れてはなるまい。

注

- (1) ステレオタイプの概念については、『社会学中辞典』や『社会心理学小辞典』(いずれも参考文献を参照されたい)を参考にした。
- (2) 新聞各社は、山一証券自主廃業発表後、経済面のみならず、社会面に特集記事を組んでいる。社会面での特集記事の見出しは次の通りである(全て、東京版である)。
「会社あしたは」(『朝日』)、「失業ビッグバン」(『読売』)、「会社が消える」(『毎日』)、「会社消滅」(『産経』)、「企業消失」(『日経』)
- (3) 詳細は、熊谷(1997)を参照されたい。
- (4) メイナード(1997:37~38)によれば、個人的経験談は、話し手の気持ちを伝えるものであり、特に、van Dijk は、個人的な話には、情報伝達のみならず、相手への忠告や注意、さらには、自分のことを誉めてもらうためなどの動機によってなされていると指摘している。
- (5) 山一証券自主廃業関連の投書とは、「山一」「大手証券会社」などの語句がある投書のことを指している。
- (6) 丁寧な表現といっても、営業関係のビジネスマンが使用する場合と、家庭にいる主婦が使用する場合とでは、その丁寧な表現の響きにも微妙ながら差が、今のところ、存在していると思われる。
- (7) 例えば、「論理的」ということば一つとっても、「論理的」とは一体どういうことなのか、さらに考えてみる必要がある。論理というのは中立的な存在では決してない。デイル・スペンダーが、『ことばは男が支配する』という著書の中で、言語は男のものであり、さらには、男の優位性と女の不可視性を表現しているものであると指摘している。この点については、ルイス・ブッシュ(1997)も、ドイツ語の例を引き合いに出しながら、ドイツ語がい

かに男性中心の言語であるのか証明している。

言語自体が男性に優位性をもたらすものであるとするなら、その言語で表現される「論理」もまた、男性に優位性をもたらすものとはいえないだろうか。そうならば、「論理的」というものも男性に帰属するものとして、しかも、肯定的なイメージを伴ったものになるのは至極自然の成り行きといえよう。デイル・スペンダー(1978:152)は、その著書で、「性差別的に世界を解釈すること」を「論理的だと考えてしまう」としている。

一方、女性も、男性の優位性に対して、普段は不可視的存在におかれ、無言でいるものの、その状況に耐えきれなくなって、何かを言うと、「感情的」あるいは「ヒステリック」だとしてしりぞけられてしまう。そうならば、女性が男性を説得しようとする場合には、「男の論理」を十分認識し、男性が理解できるようなものに翻訳しながら表現していかなければならなくなり、二重、三重の手間がかかってしまうことになる。

ちなみに、「公的」「私的」の区別については、様々な議論が展開されているが、ここでは、森田成也(1997)の定義を基本的に受け入れたい。彼は、資本主義では、労働を中心とした社会領域と、それ以外の社会領域とに分裂し、優位にたつ前者を男性が、劣位に置かれる後者を女性が担うようになる性別役割分業の傾向があることを明らかにしている。ここでは、さらに、「男が外で女が内」という表現に象徴的に示されるように、政治・経済など外の世界のように男性がもっぱら関わるものを「公的」とし、育児・家事を中心とした家庭内のように女性がもっぱら関わるものを「私的」として区別したい。

参考文献

- アバークロンビー, N/S. ヒル/B. S. ターナー(1996)『社会学中辞典』丸山哲央監訳、編集、ミネルヴァ書房。
- フォーラム女性の生活と展望編(1997)『図表でみる女の現在』ミネルヴァ書房。
- 古畑和孝編(1997)『社会心理学小辞典』有斐閣。
- 熊谷滋子(1996)「女の文体の移り変わり―過去40年間の新聞投書をめぐって―」『人文論集』静岡大学人文学部、第47号の1、263～75。
- 熊谷滋子(1997)「投書とジェンダーをめぐって―大学生におけるジェンダー認識について―」『人文論集』静岡大学人文学部、第48号の1、345～362。
- 熊谷滋子(1999)「山一証券自主廃業をめぐる新聞投書にみるジェンダー」『人文論集』静岡大学人文学部、第50号の1、145～163。
- メイナード, K. 泉子(1997)『談話分析の可能性』くろしお出版。
- 森田成也(1997)『資本主義と性差別―ジェンダーの公正をめざして』青木書店。
- 落合恵美子(1994)『21世紀の家族へ』有斐閣選書。
- 佐竹久仁子(1995)「女の文体・男の文体」『ことば』16号、現代日本語研究会、52～68。
- スペンダー、デイル(1987)『ことばは男が支配する 言語と性差』れいのるず＝秋葉かつえ訳、勁草書房。
- 武田春子(1990)「言語性差のステレオタイプ」『女性学年報』日本女性学研究会、28-39。
- Makino, Seichi(1979) "Sexual Differences in Written Discourses," *Papers in Japanese Linguistics*. vol.6. 195～217.
- Push, Luise(1997) "Language is Publicity for Men---But Enough is Enough," *Gender and Germanness: Cultural Productions of Nation*. Herminhouse, P. and M. Mueller eds. Berghahn Books. 323～26.